大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

「比較」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009986

「比較」について

伊　藤　嘉　啓

最近は何でも比較ばやりである。「比較」といふ言葉が氾濫してゐる。ある本から引用すれば、比較音楽学、比較解剖学、比較教育学、比較形態学、比較芸術学、比較言語学、比較神話学、比較政治学、比較哲学、比較法学などである[1)]。比較○○といへば、それだけで新しい研究であるやうな印象を与へるらしい。

大学・大学院の学科や専攻、科目名にも「比較」のつくものが多い。わが大阪府立大学総合科学部も例外ではない。総合科学部の上にある大学院人間文化学研究科で開講されてゐる科目名の約40％に「比較」がついてゐる。そればかりではない。２つある専攻の１つが、「比較文化専攻」となつてゐるため、専攻共通科目の比較文化特別研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと比較文化特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを加へれば、その比率はもつと高い。比較がつく科目名は、大学院ばかりでなく、学部にもある。「比較言語文化」と「比較文化論」である。

話は少しそれるが、一体「言語文化」とは、どういふ意味なのであらうか。総合科学部が出してゐる英文の説明によれば、"language and culture" となつてをり、「言語と文化」といふ意味になる。しかし、云ふまでもなく、「言語」は文化に含まれる。まさか、言語は文化の中に入らない、といふことではないであらうに、なぜ、「言語」と、より広い概念である「文化」とを並列するのか。

「言語文化」といふ言葉は、次のやうに考へられないのか。「言語文化」とは、「言語的文化」である、と。つまり、この場合「言語」は形容詞となつて「文化」を修飾してゐるのだ[2)]。（英語でも、名詞＋名詞の前者は形容詞的となる。）「文化」とは、「人間が自然に対して働きかける過程で作り出

した、物質的・精神的所産の総称」である[3]。文化には、言語的なものもあるし、さうでないのもある。常識的観点からすれば、言語的文化の代表は、文学作品である。その他に、文書になつた法律とか、歴史書なども、これに入るであらう。これらに対して、言語によらない文化といへば、音楽、絵画、彫刻などがある。しかし、言語文化のこのやうな解釈は、やはり少数派であると思はれる。それもそのはず、この言葉を最初に使つたのは、私の記憶によれば、東京外国語大学の「アジア・アフリカ言語文化研究所」である。この研究所は、アジア・アフリカの言語による文化の研究を主とするのではなく、その地域の「言語と文化」の研究が中心であらう。

道草はこれくらゐにして、比較○○と、比較を冠した呼称が最近目立つて多い。ところが、第一に、その際、使はれてゐる「比較」の内容がまちまちなのである。それが、いろいろの混乱を引き起こしてゐるやうである。次に、比較○○といふと、もうそれだけで、新しく、新しいことは、即ち正しいこと、といふ論理にしたがつて、我も我もと「比較」に飛びつく傾向がある。学生などは、その最たるもので、大学院の面接に立ち会ふと、比較、比較の連発の答に、型押した連続模様を見てゐるやうである。

まづ後者から考へると、「比較（コンパレゾン）は証拠にならぬ（パ・レゾン）」といふ格言がある[4]。これは、フランス語の語呂合せなのであらうが、一面の真理を言ひ当てゝゐる。安易な比較は、論旨の形成に何の役にもたつてゐない。むしろ、証拠となると錯覚することによつて、完全な誤謬に陥る。

こゝで前者の問題にもどり、「比較」とは何かゝら、吟味しなくてはならない。「比較」と類似の語に、「対比」と「対照」がある。比較文学なるものがある一方、対比文学といふものもある。『フランスにおけるゲーテ』（フランスの比較文学者バルダンスペルジェの著書）は、比較文学だが、『ローランの歌と平家物語』（佐藤輝夫著、中央公論社）は対比文学である。（狭い意味の）比較文学と対比文学は別物であるが、通常、対比文学は広い意味の比較文学の中に包含される。対照は、日独対照文法などと使はれる。日独比較文法とは云はない。それに対して、印欧語比較文法と云ひ、印欧語対照

文法とはしない。

これらの用法から、「比較」とは何かが、おのづと浮かび上がつてくるであらう。つまり、比較には、比較するものゝ間に、共通の物差しが必要なのである。言葉をかへれば、そこには明らかな影響関係が認められねばならない。対比の方はどうかといへば、異なつた地域における類似の社会での似たやうな文学を、それらの間には、影響関係はないとしても、「くらべる」のである。以上で、比較といふものが、大体、明らかになつたであらう。

ところで、私がこゝで主として取り上げたいと思つてゐる比較文学では、これだけでは片づかない問題が残る。比較文学には、比較といふ言葉がついてゐる以上、とにかく、狭い比較であれ、対比であれ、「くらべる」ことは共通してゐると、大抵の人は思ひ込む。そこに大きな誤解が存する。比較文学は、比較をしないからである。

比較文学が大学の講座として、はじめて作られたのは、19世紀末のフランスにおいてであつた。まずリヨンに、次いでソルボンヌに開設され、以後ソルボンヌは、比較文学のメッカとなつた。このフランス派比較文学に対して、最近はアメリカの比較文学も盛んである。ストラースブール大学教授ギュイヤール（F. Guyard）の入門書『比較文学』に、ソルボンヌでバルダンスペルジェ（F. Baldensperger）の後任として、第2代目の比較文学教授となつたジャン＝マリ・カレ（Jean-Marie Carré）が、序文を寄せ、そこには、

> 比較文学という考は更にもう一度はっきりさせられなければならない。何でもかんでも比較し、何時でも何処でもかまわず比較してはいけないのである。[5)]

と書き、さらに次のやうに断定してゐる。

> 比較文学は文学の比較ではない。[6)]

この言葉は、多くの人に意外な感じを与へるかもしれない。しかし、これ

がフランス派比較文学のモットーなのである。先にも云つたやうに、比較文学といふ学問は、フランスで発生した。どこまでも、フランスが総本山である。アメリカの比較文学といつても、それはたかだか有力な末寺にすぎない。

比較文学には、その他にも決まりがある。「それは作品がそれ自身元来もっている価値を本質的に考察するものではない」(同書、10頁)。つまり、比較文学は作品の文学的価値を判断しない。次に、自国の過去からの影響は、対象外とする。芥川龍之介と今昔物語や宇治拾遺との関係は、比較文学では取り扱はない。それは国文学の範囲である。それから、外国相互の貸借問題も、テーマとして出来るだけ避けるのがよいとされる。基本的には、研究者の自国と外国との関係を探求すべきである。以上、比較文学は何を目的としてゐるかを端的に云へば、

> 各国がまた各作家が他のものをどのように変形して借用したかに心をむける。[7]

となる。これがジャン=マリ・カレの説明である。

日本の比較文学研究の基礎をきづいた島田謹二も、「一部の自称比較文学者はタネ探しなどは意味がないと言うのですが、あれはイソップのいわゆるすっぱいブドーである。……徹底的にタネを探したい。私は生涯タネ探しに命を捧げて悔いません」といつてゐる[8]。比較文学は、一言でいへば、種本探しである。

ところで、比較文学は、いつまでも同じ場所にとゞまつてゐるわけではない。新しい地平も切り開らかれてゐる。例へば、島田謹二は、東郷平八郎の上奏文を比較文学演習のテキストに取り上げた。これは日露戦争終結後、東郷が明治天皇の御前で朗読したものであるが、原稿は参謀・秋山真之が書いた。上奏には時間の制約があるから、文章は推敲に推敲を重ねて、凝縮される。読解演習には打つてつけであつたであらう。秋山真之は「知謀湧くが如し」と云はれた参謀であり、島田の興味をよほど引いたらしく、島田には、『アメリカにおける秋山真之』と『ロシヤ戦争前夜の秋山真之』と題した大

冊（各２冊、共に朝日新聞社）がある。

もつとも、このやうな比較文学の方法に異論がないわけではない。比較文学を貸借・交流の実証的研究のみに限定せず、もつと対比の方向に積極的に拡大すべきだといふ意見である（新関良三）。

> 比較は国際的に、甲の国と乙の国との間においてのみ行われ、一つの国の文学の以内には比較文学は成立しない、という。……次にフランスの比較文学論者の規定によると、比較は必ず貸借（影響）関係ある者の間においてのみ行われねばならない。[9]

と、まずフランス派比較文学の主張を要約し、それに対して、はつきりと反対の意見を述べる。

> もしそれらに限定されねばならぬと強要することでもあるならば、それには同じがたい。[10]

それでは、具体的にどのやうなテーマが考へられるか、と云へば、「時代に前後のあるもの、土地の非常にへだたつておるもの」を「縦横に取りあげることができるであろう。」

> （相互に影響関係が全くなくて）時代をへだて場所を異にして、近似的な素材、作意、アイディアをもつ作品が現われる。それは普遍的な人間性に根ざす思想感情から発したのだが、その同じような思想感情でも、作品となる時に、表現の形が違ってくる。そうした同じ根から出たものをば違った形と姿をとるに至らしめる、諸条件の吟味からして、何か意味ある成果が期待されるものもある。[11]

いづれにせよ、はじめに書いたやうに、「比較」を冠した術語が、最近、世にあふれてゐるが、それぞれに使はれてゐる「比較」の意味が違つてゐる。

それが混乱の原因ともなってゐるのだ。そこには、時も所も物も選ばず、ごッた煮のやうに、なんでもかんでも、比較するのも交じつてゐるやうである。「比較は証拠とはならない」といふ格言を思ひ出すべきであらう。さうした中にあつて、比較文学は、明確な研究方法と輝かしい業績をもつてゐる。ただし、比較文学は比較をしないのである。

「比較」の名がつくのには、いかにも即席、インスタントの感がつきまとふものが多い。「比較」は、比較文学につきる。黄菊白菊そのほかはなくもがな。

［注］

1）渡辺洋『比較文学研究入門』（世界思想社）v頁。

2）カイザーの有名な著書『言語芸術作品』は、原題が „Das sprachliche Kunstwerk“ で、「言語と芸術作品」ではなく、明らかに「言語的芸術作品」である。

3）『新潮・現代国語辞典』（第1版）1145頁。

4）樋口陽一『比較のなかの日本国憲法』（岩波新書）3頁。

5）ギュイヤール『比較文学』（文庫クセジュ、白水社）9頁。

6）同上書、9頁。

7）同上書、10頁。

8）島田謹二「日本近代文学の一つの見方」［増田四郎編『西洋と日本』（中公新書）145～6頁］。

9）新関良三『劇文学の比較研究』（東京堂）309～310頁。

10）同上書、309頁。

11）同上書、276頁。